

「印象」は未来の予告か、「閃き」は『転ばぬ先の杖』か

* Webトップページessaisに書いたものの一式

2025年4月7日（月） 晴れ

5、6日の土日は絶好の桜見日和だった。近くの小さな公園で小一時間昼ごはん飲みをした。周縁と中央の桜がほぼ満開。いつもより人は多かったけど、ゆったり楽しめた。今は近場がいい。

ー 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー （1）

『直感から直観へのリレー』 ①

2月のリーズレター立春に書いた「印象」と「閃き」、せっかくだからこの機会にもうすこし考えてみよう。

「印象」に注目するようになったのは事務所をもってから。自宅事務所の間はそれほど気にとめていなかった。事務所を開設したことで友人知人たちが、自分の友人知人に、「こんな人がいる」を話し、ときには一緒に訪ねてきた。

もともと人の話はよく聴くほうだし、自分もしっかり話す。話題に応じて対話が進み、発展する。個人的にそれはごく自然なコミュニケーションスタイル、LYK流パーソナル・アシスタントの役割の一つと考えていた。もちろん今もそう。

そうした対話をいろいろな人と交わすことになったおかげで、えっ、そうだったの？と今さらながら一般社会の不文律を知ることになった。「普通はそんな風にしませんよ、考えませんよ」と何度となく聞いたのだ。

そうすると自ずと自分に問うようになる、なぜそういうことがわからずに来たのか、どのようにして今の自分ができたのか。視線と思考が過去をたどることになった。

そこで思い出されるのが、うんと時間は経っているのに、鮮明に、感覚までも憶えている過去の出来事、場面。そこに手がかりがあった。

2025年4月12日（土） 晴れ

- ー 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー （1）

『直感から直観へのリレー』 ②

かずある「印象」の極めつけ、あるいは出発点は、一番目の冊子『哲樂の中庭』の第2章「過去」に書いた「記憶の情景」の一つ「夏の日の縁側」だろうと思う。

子どもなりに、宇宙というか、森羅万象というか、そういうもの感じていた。はるか昔のことだけどその時の心模様ははカラダが憶えている。「岡潔」流に言えば、個の情緒がすでにそう備わっていた。

今ではこう言える。その情緒はずっと底流にあり、アイデンティの土壤にしみ込んで土台となっている。それもかなりどっしりと。

案外それに気づかず一生を終えるものかもしれない。でも、起業など、自ら大きな転機をおこし社会に揉まれると、性（さが）や業というようなものを思い知らされる。

多種多様の、四方八方からの反応がわが身に押し寄せるから、否が応でも自分を観察することになり、自分を思い知ることになる。

“人間、自分を超えることはできない…”と覚るが、限界があるという意味ではない。他の誰でも、その人ならではの個性、アイデンティがあるという捉え方。

だから、自分を思い知っても意外に爽快感がある。「境地が進んだ結果、ものが非常に見やすくなったという感じだった」（岡潔）に似ている、不遜ながら。

ところで「印象」の対象が人の場合、双方向の現象となる。こちらのうけた印象は、その前に相手がこちらにうけた印象に抛る場合がある。これがまた、なかなかおもしろい。

2025年4月16日（水） 晴れ

昨日は変りやすい天気、午後2時半ごろには大阪市内でもかなり強い雨がふった。気温も低く、夜はまたヒーターをかけた。雨が、今朝はすっきり青空。

- 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— (1)

『直感から直観へのリレー』 ③

『チャンスは心構えできている人だけ覇を占める』（パスツール）は、チャンスは自分以外の他からやってくるから、そういえるのだと思う。

「心構え」は、物事に対するある種の覚悟。目にみえないが、「印象」には表れるはず。

そういえば知人の知人の女性のことを思い出す。金融機関に就職し中堅になり始めの時に伝統工芸の道に入った。生まれ育った関東を離れ、京都で住込み修業に入った。

まだ一年もたたない時期に初めて会った。小柄で細身、ショートヘア、化粧つけなし、素肌が瑞々しい。それだけでも十分印象的だった。

でもなんといっても、顔つき、表情。ぱっとみて、“うつくしい…!”と感じた。神々しい美しさ。まさに覚悟、潔さが表れている感じがした。

長い修業期間を終え、自宅工房をかまえ、職人へと独り立ちした彼女の道は、チャンスが自然に舞い込み、続いている。

伝統工芸の修業の道とは次元が違うけど、独自のスタンスで業を始める者には、孤軍奮闘が待っている。

それなりに通じると思い込んでいる〈独自〉であれば、なおさらで、始めたものの、やめるべきかと考えたほどだから、しだいにどこかで覚悟、あるいは前向きな諦めができた。

それが「心構え」になってか、ふり返ればチャンスのすべては他者の「印象」に端を発してやってきたと気づく。

“この人は…”。初対面の時にそう感じた追って話してもらった人がいる。直接会う前にWebサイトをみて、同じ感想をもってもらった別の人もいる。

といって、10人いても大半の人には？のまま。でも100人いて1人には！の「印象」をもってもらった。そこから道がひらけた。

他者側の自分への「印象」には、未来への徴候がある。自分側の他者や外界への「印象」には暗示がある。そう言える気がする。

2025年4月21日（月） 晴れ

先週後半から急に暑くなった真夏日のところも多かった。19日の土曜の午前、“ちょっと堪えているなあ…”と感じた。感じられたから無理をしないようにした。昨日は昼寝をした。睡眠はやはり大事、堪えているのが取れた。

ー 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー （1）

『直感から直観へのリレー』 ④

日々たくさんの人と行き交う。時々目をひく人もいるけど、ほとんどはその場かぎり。でも個人的に今も印象にのこる三人がいる。

一人はたぶん60代初めの女性、あと二人はともに30代後半の男性で、そのうち一人はイギリス渡航の帰りの飛行機でみかけた。

おそらくインド系で、白のまじった褐色肌はつやつや、中肉中背で上質だろうスーツが体にきれいになじみ、なぜか目が合ったその柔らかい笑みに気品が感じられた。

財閥系の超エリートか、ファーストクラスのアナウンスにゆったりと機内へ入っていった。1989年の夏のこと。

もう一人の男性は1984年頃、なんば高島屋1階化粧品売り場のすこし離れたところから店内の通路を足早にすぎる右半分から背中、歩く姿勢が颯爽としていた。

彼も中肉中背、服装は羽目を外さないカジュアルさ、髪はすこし伸ばしていていい感じで流れ、お目当ての売り場があるのか、わき目もふらず、進んでいく。今も映像が浮かぶ。

さて女性の方かというと、これが格好いい。まだ会社員時代のこと、勤めていた会社御用達のカウンターだけの寿司店。上司同僚とカウンター端で食事していたとき、目の先正面の入口が開いた。

入ってきたのは女性、一人。なじみ客ではないようで、少し間があって、「お一人ですか？ どうそそこへ」と店主。そのまま正面のカウンターにすわった女性。

白髪まじりの髪をシニヨンにし、メイクはパウダーだけという感じ、うすいグレー色のワンピースに本珊瑚に違いのないネックレスがシックに調和。入店から席について注文するまでの様子が自然で、堂に入っている。

ずっとみてしまった。上司と同僚に小声で正面をみながら、「カッコいいですね」と呟いた。心の中ではこんな印象の人になれたらいいと感じた。

三人とも、何がしかを物語っている。もし彼らのライフを知ることができたなら、直感したものは直観につながっていたんじゃないかと思える

2025年4月24日（木） 曇から晴

今日は晴れの予報、気温は23℃前後、昨日雨だったから陽が照ると蒸し暑くなりそう。すっかり日の出時間もはやくなり、5時には明るい。大型連休も間近、ひとごとだけど。

— 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— （1）

『直感から直観へのリレー』 ⑤

いつか仕事で会った人が、いろいろ話したあとに、「わたし、運がいいんです」。自分でそう言う人はめずらしい。どういう風に運がいいのか尋ねると、例えば籤によく当たるとか。

運がいい分、欲張らないようにしている、誰にでも丁寧に接するようにしていると言う。あまり他人に言わないことを今日は公表していますよ、という表情を浮かべながら話してくれた。

しみじみ、聞いてみないとわからないものだなあと思った。実際に〈運がいい〉人はいるに違いない。それを口にするとう逃げちゃうようで、普段は内に秘めている。そういう人が少なからずいるかもしれない。

そう想像すると、何となく愉快的気分になった。なぜだろう。豊かさを感じるからだろうか。人それぞれに潜在する多様性、個性の中の多様性、そして多様多種の想い、心の働きなど等。

ところで、自分は〈運がいい〉か？ わるくはないが、籤に当たったことはあまりないし、特別「いい」とは言いがたい。少し考えて…、そう、運がいいとは言えないけど、不運に遭わないとは言える。

〈運がいい〉のは天の思し召しのような…、不運に遭わないのは自身の為す業のような。

ずいぶん前、同業の集まりでたまたま知り合った人が最近不運に遭ったと話し出した。コンサルした〈一見さん〉の会社から報酬をちゃんと得られなかったという。経緯を聞きながら、“それは、自分から蒔いた種だ…”と感じた。

最初の出会い、受託のやりとりなどから、容易に想像できた。感じたことをチラッと口にしてしまった。すると、えっ、何が、どこが？という風に返された。ああ、わからないのか…。それなら言ってもはじまらない。

この時のことを思い出して、〈運がいい〉わけではないが、不運は遠ざけてきたかな、と。自分側の「印象」の大半は、ひょっとすると、不運を回避しうる直観によるものかもしれない。

一昨日の土曜は「絶好の行楽日和」だった。陽ざしはつよくても風がつめたかった。今日は雨だけど、明日はまた晴れの予報。大型連休入り、長い人は11連休とか。しっかり休息を。

- 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— (2)

『独りの時間、静寂の〈間〉』 ①

JR環状線車内で側に立つ乗客、同僚らしき男性3人の会話。夏休みで妻と子どもたちが実家に帰省、「独りはつらい、家に誰もいないのがさみしい」と1人が言えば、「そう、そう。普段は気づかないけど」。

さみしい？ 男性はさみしがり屋というけど、実際の声を聞いたのは初めて。試しに知人の男性にこの話をしてみた。すると、「さみしい？ 考えられない！」と一蹴。

「独りで将来さみしくない？」。「…？そう感じてたら、今こんな風にしてないと思うよ」。「そりゃ、そうよね、ごめん、ごめん」。長年の友人はふと素朴な疑問がわいて聞いたのだと思う。

仕事で知り合った女性で、独りで遊びに出かけたことがないという人がいた。10代の時から散歩や美術館、映画館など、独りでいくのが基本と話す相手はびっくりして、「さみしくないですか？」。

全くない。むしろ独りの時間をもつために出かけるようなもの。京都にはコロナ禍前までよく行った。京都駅から目的地までの道のり、当地での時間、帰りまでの一連の流れに〈独り〉の効用がある。

視る、聴く、嗅ぐ、触れる、味わう。そこで感じ、考える何かを自分に期待する。考えたいことが先にあって、思考をめぐらせるために出かけることも多い。

決定的な発想の転換を授かった時もある。大阪から京都へ向かう新快速の車中。

窓際の席から西山が見え始め、ひらけた風景がしばらく続くのを眺める間にも、直近の問題に頭をめぐらせていて、風景がまもなく去る直前のある瞬間、ハッと頭の中の霧が晴れた。20年以上前のこと。

先日ある文章に「独りの時間、静寂の時間をつくる。これはわたしの生きる糧とっていい」と書いた。独りの時間に初めて使った〈生きる糧〉。自然に出てきた。

5年前でもこの言葉は出てこなかったと思う。なんとなくだが、かれこれ暗黙にはそう感じていたことを、ようやく目にみえるように認識できるようになった。そういうことではないだろうか。

2025年5月1日（木） 晴れ

火曜日から晴天が続く。カラッと風はつめたくさわやか、新緑も映える。今日から五月、快適な時季が年々みじかくなってきたから、今月は「野に出よう」。

ー 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (2)

『独りの時間、静寂の〈間〉』 ②

掃除や馴染みの公園の散歩など、カラダがおぼえている作業や動作は、頭を働かせる、思考をよくめぐらせる。料理がその時だという女性科学者もいた。

独立以降で二度、休日に家で掃除機をかけながら、決定的な決断をした。掃除機の音がうるさいけど、頭の中は囲われて、自分の世界に入れる。

直近にあった出来事、ここ数日に感じたことなどがめぐる。はたまた自分の仕事と人生を見渡して…。

廊下から部屋、部屋から廊下、掃除機をひっぱり回しながら、頭の中に自分が入ったようにみるうちに、ある瞬間、“…そうだ、そうしよう！”。

一度は2005年春のこと。その数か月後に、その決断にそった仕事がいがい思いがけないところから舞い込んだ。

二度めは2010年1月のこと。「中井正一」の言葉を地でいった。表立っていないが、そういう決断であった。

『前の時間がそのまま流れているのは滞っているのである。切って、捨てて、脱落して、新しく生まれるからこそ生きているのである』（中井正一）

仕事でたくさんの人と出会う。26年前はまだ若かったから、セミナーの男性受講者に一方的に好意をもたれ、付きまとわれたことがある。

この時に気づいた。頭の中を余計なことであばわれたくない自分。男性の行為に悩まされ、気をとられてストレスになっているのがすごく理不尽におもえた。同じストレスでも前向きなことではない。

男性には直接はっきり言った。ものわかりはよい人で、妙な展開にならずに済んだ。いまの時代なら、ちょっとややこしくなったかもしれない。

何かをしてても、独りの時間をもつこと。自然に頭がめぐるような〈間〉をもつこと。なぜか誰かのことを思い出し、前日の打ち合わせをふり返り、数日前に人に聞いた話をなぞるような合間。

思い出したことに意味を感じて相手に手紙を書く、打合せ時点では注目しなかったことに気がとまり次の一手を打つ、聞いた話に関連する情報をあたる。時にトラブル回避につながったこともある。

頭の中を草原のような状態にしておく。ちょっとした勘違いや言い方をされ気分を害すこともある。正すほででないのが普通だし、自分も同じだろうし、スルー。頭の中を広々とさせて、天の恵み待つ。

2025年5月5日（月）立夏 晴れ

大型連休後半、さわやかな晴天が続く。街も町も新緑が目にはやさしく、清々しい。今日は立夏で「子どもの日」。かしら餅を買いたいけど、梅田へ出るのも、スーパーのものをかうのも…。

— 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— （2）

『独りの時間、静寂の〈間〉』 ③

「自分の将来のことなんて、考えたことないです、そういわれると…」。40代なかばで再びシングルになった女性の相談にのっていて、相手はつぶやくようにそう言った。

夫、子ども、舅や姑の世話に追われと、そうもなり得るのか。じゃ結婚前はどうかだったのか。「うーん、どんな風に考えていたのか、なんか、今ではもう思い出せません…」。

もともとそれほど考えない性質かもしれない。まさか自立せざるを得ない状況になって、途方にくれた。当面の生活状況を確認しながら、段階的なアプローチを助言した。単発の案件だったから、その後を知らしめない。

一昨日晴れの休日、洗ったカーテンを元につけながら、ふとある考えがわいた。女性には3つのタイプがあるかもしれない。個を生きる人、野心の実現に女性性を使う人、他の付屬的に生きる人。

ほんの勝手な着想だが、メモしたから、ここに書いてみた。どれがよいわるいの話でもなく、自分はどう生きるかを考える時の目安にしたかったのかもしれない。

「この間、ぱっと、気づいたことがある。自分の守りたいものの究極は自分の精神性！。そう書いて見せられたように、はっとして、すべてがわかったような…」。

聴いていた4人はキョトンとした。会社員時代の友人たちと久しぶりに会って話して、最後に近況をふられ、直近最大のトピックを話したのだった。今から10年前のこと。

しばらくして1人が、いったい何があったのかと尋ねた。よほどのことがないと、普通はそんなこと考えないと。うん？いつも考えるけどを返すと、また少し間があった。別な1人が「哲学的やね」と締めくくり 話題を変えた。

考えがちな人はどうしても考える。考えなくて済む人は考えなくて済む。それで合っている、精神衛生上もいいのだろうと思う。わたしには自分の頭の中をみる時間が必要だ。

2025年5月8日（木） 晴れ

今日は朝からよく晴れている。風はまだつめたい。日中は25℃まで上がる予報、カラっとして散歩にちょうどよい日和。

- 一 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (3)

『気配、雰囲気』 ①

気配、「古くは〈けわい〉、はっきりとは見えないが、漠然と感じられるようす」。

雰囲気、「その場やそこにいる人たちが自然に作り出している気分、また、ある人が周囲に感じさせる特別な気分、ムード」。

事務所開設30周年、あえて辞退した仕事が一度だけある。俗にいう営業はしないので、こちらをわかって声のかかった案件で。

マッチングする機関からの仕事だった。彼らはケースをたくさん扱っているから、コンサルされる・する双方にズレはあまり無い。

何の不安もなく担当者とともに先方の事業所へ行った。いつものように予備面談を始めたが、そのうち、“ちがう…”。

こちらの尋ねることへの返し、その話し方、言葉の選択、表情、視線、など等、初めて接する感じだった。

理念を語り、実践の進展の語る。その現場にして話を聴いているから、疑う余地はない。しかし響いてこない。

乖離があるように感じた。理想を語る言葉、物理的な設備は整っているが、その根本にあるべき〈温かみ〉が伝わらない。

ちょっと空おそろしい感じがした。ただしこれはまったく個人的な感覚、他の人ならそんなこともなかろう。

帰り道、担当者に最初はそれとなく、「わたしで事足りるでしょうかね」。担当者も何か感じたようであった。

「そんな風に言われるのは珍しいですね、勝手がちがいますか?」。そこでここぞとばかり、「たぶん他の人の方がいいと思います」。

快く受け入れたもらった。たぶんそのまま進んでいたら、成果どころか、トラブルに発展したかもしれない。

当然後ろむきのストレスをかかえることになったろう。時間をおかず辞退を申し入れて、よかった。了承してもらって、救われた。

2025年5月12日（月） 曇り

昨夜すこし雨がふった。晴れるのは夜になってからのようで、日中は曇マーク。風がつめたく、衣替えして夏の制服の小学生たち、すこし寒そう。

ー 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (3)

『気配、雰囲気』 ②

夕方の、夕暮れまでいかない、陽が傾きだしてしばらくした時間帯が子どもの頃はいやだった。そう感じた瞬間のことも覚えている。

何というか、陰陽でいえば、陰の気配のようなものを感じた。否、まるでこの目で見ているような気がした。

かといって、取っ払いたいという気持ちはなかった。そもそもそうできるものでないとどこかでわかっていた。

10代の終わり頃にはすっかり馴染んでいた。日中の終わり、夜の始まり、そのつなぎの自分を仕切りなおす〈間〉。

『悲しき熱帯』（レヴィ・ストロース）に夕方の時間帯にふれた箇所があった。ああ、そう、そう、という感じがした。

薫風五月。夕暮れ前の時間帯を堪能するのに今が一番よい季節。近場の公園を散歩するだけで仕切りなおせる。

緑の中のカフェでリースリングでも口にしながら木々をみて、空を見上げれば、もうそれだけで〈整う〉。

仕切りなおして、整えて、明日をまたむかえる。

2025年5月16日（金） 曇のち雨

今日は午後から雨の予報。昨日から少しムシとする。明日あさってにかけて荒れ模様の予報。「梅雨の走りのような」とは、ちょっとはやい。

- 「印象」は未来の予告か
「閃き」は『転ばぬ先の杖』か— (3)

『気配、雰囲気』 ③

先月だったか、新聞に載った研究成果は目をひいた。受精時の気候の寒暖がのちに肥満リスクと関係するという。

東洋医学の基礎部分では、どの季節に生まれたかによって体質をわけている。理にかなっているわけか。

トマトにはリコピンと同じ効用の「エスクレオサイドA」という栄養素があると最近わかったらしい。透明なので認知されにくかったとか。

生まれる前の環境が自分のカラダに影響していたり、見えないけどよく働いている栄養素があったり。

宇宙の物質は4%しかわかっていないというし、この世は見えていないものだらけと言ってよさそう。

気配や雰囲気というのは、はっきりとは目にみないけど、見えているように感じならなおさら、スルーしてはいけない。

今でははっきりそう考える。でもずっと以前から、それらを抛りどころにしていた気がする。

スルーしてしまうと、あとで”しまった…”。仕事上で過去に2度ある。もう少しあったはずだけど、印象にのこるのが、2つ。

以来、特に仕事では注意する。感じたものを、“これはどういうことだろう…”などと吟味する。そして次を考える。

ある時は自分にお祓いをした。仕事で初めて会った相手だったが、なんというか、邪気を感じてしまった。

こちらの問題としてそう感じたということ。そのまま事務所に帰るのも、帰宅するのも、ダメな感じがした。

ひとつ閃いた。ちょっと遠回りにはなるけど、近い距離に神社がある。そこへ寄り、入りはせず、鳥居の前に立った。

どこでも手を合わせるものじゃないと親から教えられている、だからご挨拶程度に軽く手を合わせ、礼をした。

これだけでいい、個人的な気のものだから、一つの方便として自分なりの儀式。気がはれた。

ところで、今朝よんだ『最終講義』に、「勘所をおさえた配慮」という言葉あった。

熟練者は「あれこれ勘どころをおさえた配慮」によって、事をうまく運んでいる、それも当人はあまり意識することなく。

「勘どころ」。さてその手前には、「気配」や「雰囲気」の察知があるのではないか。

2025年5月19日（月） 曇のち晴

先週九州南部が梅雨入りした。沖縄よりも早いのは初めてとか。その日から大阪もムシっとしてきた。16日の土曜は梅雨時季のような雨の降り方だった。今週の予報はほぼ曇マーク。近畿もこのまま梅雨入り？

ー 「印象」は未来の予告か

「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (3)

『気配、雰囲気』 ④

『最終講義』を進めながら、気配や雰囲気を感じる、みる、ということの認識を新たにしつつある。

出来事の「リスク回避」あるいは「改善」や「機会」といった外部的なことへの貢献だけに目がむいていた。

そもそも「感じる」、「感じられる」は、精神的に健康で、そうでないと、そういった感覚が意識にのぼりにくいとは…。

一つ思い出すことがある。仕事で相手に尋ねることになるワンフレーズがある。「それで、どう感じましたか、考えましたか？」。

8年ほど前だったか、ある相談者の話をきいていて、そう尋ねた。大抵の人は、なんとなく言葉を返してくる。

人によっては、日頃から自分の観察がよくできているらしく、言葉を適切に選び、細かな心模様も話してくれる。

ただしそういう人は多くない。個人的な経験では、2割程度。ほとんどは、ざっくりとした、表面的な感想がかえってくる。

それも返ってこなかった。こちらが尋ねて、返事がかえる一般的な間をこえても相手から言葉が出てこない。

”…?”、待った。相手はまるでフリーズしたような様子。

待つ限度のタイミングで同時に、こちらは「いやいや、特に何もなければ…」、先方は「…急にきかれて、記憶が…」。

難しいことではなく、本人自身が経験したことについて尋ねている。適当にかえすこともできるのに、どうしてだろう。

その時点では、「聴覚情報処理障害・APD」かもしれないとおもった。ひょっとすると、経験を「感じる」に問題？

ぱっと見た目にはわからないその人の得手不得手ある。直近では言葉、読解が苦手という人がいた。

人を支える仕事、いろんなことを知っておかないといけない。想像力と受容力も養わないといけない。あらためてそう感じる。

『最終講義』によれば、ランダムに数字が言える、「枠の中をでたらめに仕切る」ができるのも健康な証拠という。覚えておこう。

2025年5月21日（水）小満 曇のち雨

昨日は晴れた。梅雨の五月晴のようだった。関東では猛暑日に近いところも多かった。今日は夕方から雨の予報、ムシッとして、とても5月中旬とはおもえない。今日は「小満」。

— 「印象」は未来の予告か

「閃き」は『転ばぬ先の杖』かー (3)

『気配、雰囲気』 ⑤

「空気を読む」。「周囲の状況や人々の気持ちを察して、適切な振る舞いをする。日本文化に根付いた考え方で、言葉にされていないニュアンスや期待を感じ取ることが重要とされている」。

よくいえば協調性がある、でも「迎合」の場合も想像できて、主体性のない表面的な振る舞いの印象もある。

空気を読むためには、その場の雰囲気を感じとることが必要だから、そういう感覚は多くの人が長けていそう。

海外生活の長い人から次のような話を聞いたことがある。日本人とアメリカ人はよく似ている。どちらも人の目を気にする。

でもその先が違う。人の目を気にして、日本人は自分をおさえ、アメリカ人は目立とうとする。妙にうなづけた。

文化は長い時をかさなて定着していく。生活文化は代々引き継がれていく。外国人としてぼっと生まれた者には根付いていない。

気配や雰囲気を感じとったとして、たわいないことはスルーし、許容できないものはそう伝えるのが、基本パターン。

それに対してまたおかしいと思えば、そう伝えてもらうのが「コミュニケーション」という考えがベースにある。

でも伝えない、伝えられない人も多かったかもしれない。付き合いきれないと自然に去っていった人も少なくなかったか。

異論、反論の先に、互いの理解が進むこともある。一方で、後の軋轢を回避できたということもあり得る。

ともあれ、気配や雰囲気を感じるという、その「感じる」は、個々のアイデンティティーの表れの極み、のような…。

個々のその感覚に重みを感じて、「感じる」ことに応じて、主体的に次のアプローチをしたいもの。